Meisei University

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

6

『嘆きの歌』
ベートーヴェン賞
初めての契約
ハルとライバッハ
(1880-1882)

《劇場の地獄に落とされて…》

1880年の春、マーラーは夏休みのために魅力的な計画を立てた。アントン・クリスパーやクルシシャノフスキー兄弟と一緒に徒歩旅行でベーマーヴァルト、フィヒテルゲビルゲを通って、兄弟の故国であるエーガーまで行き、ついでバイロイト、ニュルンベルク、オーベーランマーガウを訪れ、当地の有名な「受難劇」公演を見るというものだった[1]。天命というべきか、というよりもグスタフ・マーラー独特の運命によって彼はこの計画を実現することが不可能となる。というのはこの年の5月彼の人生において初めて指揮棒を握る、音を出さないのに、音を促し、出てくるすべての音を制御するこの楽器を手にすることになる。

6月14日ヨーゼフ・ポイスルから手紙を受け取り、イーグラウの少女との純愛に終止符が打たれたが、彼はすでに自分自身を、そして自分の運命を意識していた。いずれにしても彼はすでに自分自身がおのれの苦しみを長い間反芻し、そこから苦しみの喜びを引き出す類の人間ではないことを知っていた。全身全霊行動に向かうという新しい人格が彼のうちに目覚め始めた。この人格について彼は何年もたってからナタリー・バウアー＝レヒナーに描くことになる[2]。「僕たちは、人生が僕たちに与える最も酷い一撃をまだ受けていないという点で似たようなものだけれど、僕自身としては死んだとしても三日後には復活していると言うことが出来る。」

このように彼はもうすでに立ち直り、自分自身のあり方を変えようと決心した。3月21日彼は『嘆きの歌』第一部の草稿を終える、4月1日には大学に登録する、しかし彼はすでにこの果てしのない学生生活にうんざりしていた。彼は彼以前の多くの作曲家の例に従って、指揮者のポストを探し始めた。多くの友人や知り合いに彼は助力を求めたが[3]、その中にテオドール・レティッヒ[4]がいた。二年前マーラーは彼の出版社のためにブルックナーの『交響曲第三番』を四手用ピアノに編曲していた。このレティッヒのお陰で彼はこの業界に《不

* 一般教育　教授　フランス語

NII-Electronic Library Service

Meisei University

可避》のマネージャー［impresario］なるものと関係を持つ、この時は、グスタフ・レーヴィー[5]であり、この先ほぼ十年間彼の専属代理人になる。

1880年3月12日マーラーはレーヴィーと五年契約を結ぶ。この契約によってマネージャーはマーラーが得た全ての給与と謝礼金から5パーセント天引きすることになる[6]。レーヴィーが最初に提示した仕事は実際それほど輝かしいものではないが、レーヴィーの考えではおそらくこの若者の能力がどのようなものか判断材料とすべき試用期間みたいなものだろう。これは高地オーストリアの小さな温泉町ハルで夏の間、田舎の小楽団が上演するオペレッタ公演を指揮するというものだ。マーラーの両親はマネージャーの提示に全然喜ばなかった、というのも、両親はこれだけ輝かしい学業を残した息子には、たとえそれが息子の能力をこえるものだったとしても、それらしい地位を望んでいたからだ。しかしマーラーの忠実なる守護天使であるエプシュタインは、キャリアはこのようなつまらないポストを出発点にして積み上がっていくものである、と彼にうながしこの仕事を受けるよう忠告した。

ハルは後にバート・ハルとなるが、リンツからそれほど遠くはないプファルキルヒェン近郊の地味な温泉地であり、ヨードを含む温泉で有名である。温泉の建物から出発して、今日なら《Priehlaussicht》に行く街道を辿れば、すぐに分岐点に着く。角に立てば標識に《ヒリシャー荘》の指示が見える。この道は実際瀟洒な別荘にたどり着く、森に沿って建てられ、この土地は明らかにこの別荘を臨む険しい斜面から切り取ったものだろう。この別荘のすぐそばに、ほとんど消えかかった表示板に《劇場》とある木造の納屋がある。劇場と名付けられた建造物がこのようなつつましく奇妙な場所に建てられていることは目を疑うばかりだ。ところがこの木造の掘立小屋こそ未来のウィーン帝室及び宮廷歌劇場の芸術監督が指揮の初陣を飾ったところなのである。

19世紀後半、ヨーゼフ・ヘルマン・ヒリシャーという実業家がこの温泉施設を取り仕切っていた。この人物は芸術趣味があり、1866年に著名なオーストリアの詩人グリルパルツァがハルに湯治に来たとき知己を得たことが誇りだった。ヒリシャーは詩人と知り合ったことに強い影響を受け、その数年後、彼の別荘の地所に小劇場を建てた。当初は木造平屋の納屋に過ぎなかったが、4年後には上階を増築し、二つの小塔が入り口を囲み、それによって全体がチロル様式になり、鄙びた中にも優雅な雰囲気を醸してはいるが、残りの部分はどこをとっても優雅さのかけらもない[7]。

このように拡張されホールは6席を持つロッジが16、平戸間に16席、回廊に66席、バルコニーには揺り椅子が数席、つまり、着席可能な席は200席に届かない[8]。劇場は《芸術監督が、比較的新しい最良の喜劇とオペレッタを上演するという条件》で温泉事業と州から補助金を得ていた。火災の危険性から上演は午後5時までで、人工照明で行われていなかった！　日の出ている午前中、オーケストラの楽員たちは温泉施設の庭園で湯治客が昼前に散歩する楽しみのために演奏しなければならなかった。

このつつましい建物は現在鶏小屋でありガーデン用具の物置に使われている。とはいえ、また1921年に、増築された二階部分と勿体ぶった小塔は取り壊されたにもかかわらず、まだ当時の使用目的の痕跡はいくつか見いだせる。扉の外側には《ロッジ9》、《ロッジ10》などと書かれている。建物の内側には以前はロッジをわけ隔てていた隔壁がいまでも見える。舞台の痕跡はもうない。奥の背景の壁には色の塗られた紙の残骸が散見し、張り紙に《ホー

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ルの隣室禁煙》と書かれてあるのが読める。

芸術監督と劇場の管理は、マーラー時代、ヴィクトール・ベルタルなる人物に任されていた。彼のサインのある《おわかれのお土産として》と題された資料が残っている。これは1875・1876年シーズンの終わりにプログラムと一緒に観客に配布された。それによると、そのシーズンは、劇場の構成員は男性11人、女性12人であり、レパートリーは豊富で、6月には17作品、7月には14作品、8月には11作品が上演されている。特にこれにはオッフェンバックの『青髭』『天国と地獄』『トレビゾンド公爵夫人』の三作品が含まれ[9]、オーストリアの作曲家カール・ミレッカーの『三足の靴』もある[10]。

さらに1878年3月30日付劇場目録が残されている。これには《合格》の評価が付され、ベルタルよりもその後継者に対する関心をもつ人物がサインしている。その名前はマーラーの初めての劇場経験に分かちがたく結びつけられている名であり、カール・ルードヴィッヒ・ツヴェレンツという。俳優の家系出身で、1867年頃から俳優のキャリアを始める。後にオペレッタでコミックな主役級を歌い始め、そしてさらに、演出家、劇場監督になる。彼の生涯は当時のオーストリアにおけるオペレッタの異常な人気に緊密に結びついている。1889年彼はウィーンに登場するが、その長いキャリアの当初、帝国内の多くの都市でツヴェレンツの名が常に見出せる。1879-1880年の冬シーズン、彼はハルから遠くないシュタイアの劇場で指揮をしている。翌年の冬シーズンには、マーラーの出身地であるイーグラウの劇場の命運を司ることになろう。

残念ながら1880年夏シーズンにハルの小劇場で上演されたプログラムはわかっていないが、その前年の冬シーズン（1880年の4月25日に終了する）にツヴェレンツがシュタイア劇場で行ったプログラムを参考にして想像することが出来るだろう。目立つところでは、ヨハン・シュトラウスの『ローマの謝肉祭』『こうもり』、アレクサンドル・シャルル・ルコックの『ジロフレ＝ジロフラ』『アンゴー夫人の娘』『千人の娘たち』、オッフェンバックの『街灯の結婚』『ジェオルジーの美しい妻たち』、そしてスッペの『美しきガラテアの娘』など。ハルでは幸いなことにマーラーは温泉施設の四阿で行われた演奏会の指揮をしなくても良かった。この芳しくない仕事はフェルディナント・ツァイドラーという人物に任せられていた。

マーラーの最初の伝記作家たちはマーラーのハル滞在について曖昧な情報しか手にすることが出来なかったので詳述してこなかった。今では未公開の資料があり、少なくとも5月20日から7月1日まで詳述することができる。というのも無署名だが一通の端書があり、それには1880年5月25日ウィーンの消印で、北部オーストリア、ハル、劇場内、宮廷楽長グスタフ・マーラー殿と宛名書きされている[11]。書体はすぐに誰のものか明らかになる。もちろんブルックナーである。彼は謎めいた文と無署名で、この若い友人が今まさに従事しているやりがいのない仕事について、ユーモアを交えつつ彼を慰めている。端書は以下の通りだ、

夜通し
（スッペのオペレッタ『ファティニーツァ』の行進曲のトリオ部分の引用が続く）[12]
前進…

NII-Electronic Library Service

Meisei University

（ここでは『ラインの黄金』のワルハラのライトモチーフの引用）
光へと。

1940年の戦争以後も、ヨーゼフ・ヘルマン・ヒリシャーの孫娘[13]は1880年に劇場の職員に支払われた金額表を所持していた。そこにマーラーの名前が載っている。5月15日から7月1日（この日付がマーラーのハル滞在の最終日とはっきりと言い切ることの出来るものだ）までの期間、彼は月に30グルデン受け取ったと記載されている[14]、つまり彼は45グルデン受け取り、そこからレーヴィーの取り分が引かれた。とはいえ毎回の公演ごとに受け取る50クロイツァの《謝礼報酬》が加算される。ただそれでも、この劇場の最も安い報酬というわけではなかった。

ハルのオーケストラは最大で15人の楽員を擁する（これは前シーズンにおけるシュタイアー劇場の楽団員数）。20年後マーラーはハル滞在について滑稽な話をいくつも彼の妻に話すことになる。その話にはおよそ芸術的なものではない仕事もあった。ピアノのほこりを払い、公演前には譜面台に楽譜をおき、公演が終わればまたそれらを片付けるのも彼の仕事だった。幕間にはプリマが、といってもツヴェレンツの女房以外の何ものでもなかったが、よく彼に子供を乳母車にのせ劇場の周囲を散歩させた[15]。彼が唯一劇場監督に対して拒絶できるものと思った仕事は、舞台上で作品の役を演じることだった。おそらく拒絶したことは失敗だったろう、というのは、役に立つ経験を沢山やってみることは必要なことだったろう。

この栄光から遠い仕事によって若き理想主義者が感じた感情の動きについては、幸いにも彼自身の手になる友人アルベルト・シュピーグラー宛6月21日付けの手紙がある。《…僕については、正常な状態なら事態に対処できる。君にも想像できる通り、僕は失望すると反動の揺り返しが来る、だからといって、冗談やおふざけでこの苦痛をやり過ごそうともしない。僕はそれでもなお立っているよ、常にそうありたいと思う。汚穢にたかる蠅どもに絶望へと追い込まれたらそのままでいるなどばかばかし過ぎるだろう。僕が不平を言っているのはもっと別の、君にはわからない理由からだ、この理由は今日に始まったことではない、君がなんだと言って肩をすくめるような取るに足りないつまらない理由ではない。》

確かにマーラーは『リューベザール』の楽譜（もしくはテキスト）をリーピナーに渡してあった、ところが長い間彼からどのような便りももらっていない。今や自分のオペラに取りかかりたかったのだろうが、唯一の草稿がまだ存在しているのかどうかさえわからない状態だった。《ありとある不愉快さに堪え忍んでいる上に、自分自身のまいた種にもいらだち、不愉快の種が倍加すると、文字通り癇癪の発作に参ってしまう》と付け加えながら、シュピーグラーにどうか彼が生きていることをリーピナーやクリュシシャノフスキーに思い出させてくれるよう頼んだ、実際マーラーは彼らから便りをもらっていない[16]。

アルマ夫人によるとハルでマーラーは、アカデミー会員であり上流社交界の高名な肖像画家ハインリッヒ・フォン・アンゲーリ[17]のもとに集まった若い趣味の良い上品な連中の小さな集まりに参加していた。若者たちは彼を遠乗りに連れて行ったりこのちびの田舎者にいろいろな作法をふんだんに教えた。かつて一度も上流社交界の連中と接触したことがなかったマーラーは完全に目がくらんだ。それで劇場の仕事のことをすっかり忘れてしまった。ある日劇場に遅れてしまい、すでに公演は始まっていたので直ちに解雇されても良かった。彼が

NII-Electronic Library Service

Meisei University

解雇されるならマーラー同様責任があるマーラーの友人たちは友情の証として翌日彼をハルの駅まで送って行こう、秋にはウィーンで会おう、と約束した[18]。数週間後マーラーは彼らと再び会おうとしたが、彼の前で扉は閉められてしまい、彼は激しいショックを受けた。おそらくこの辺に、ウィーン歌劇場の音楽監督だった時代、ウィーンの貴族階級に対する彼の疑念、慎重な態度の一因を見るべきかもしれない。

マーラーの性格から考えると、たった一度のことであろうと、彼が義務を放棄しえたことに驚いてしまう、しかも以上のような理由から[19]。おそらく彼がこのような違反をしてしまったのは、倦怠感や激しいいらだちからだったろうが、いずれにしてもそれは意識的だった。事態がどのようなものであれ、またこの解雇の話が事実であったとしても、この災難は後の彼の履歴にわずかな影響も与えはしなかったようだ。早速1880年6月21日に彼はマネージャーのレーヴィーにハルから手紙を書いている[20]。《拝啓　冬季のオペラ指揮者の職を探していただけないでしょうか。ツヴェレンツ監督が私に圧力をかけてくるのですが、それでも家族のことを考えるとイーグラウ劇場の指揮者を受けることは出来ません。私の能力をご存知のことと思いますし、どのような劇場でもそのような地位なら私にはやり遂げることが出来るとご承知でしょう。何か良いオペラ座の指揮者を見つけてくだされば、公演料の50フローリンをあなたに進呈したいと思っております。おそらく大きな劇場の副楽長の職を見つけてくださるようお願いします、出来得れば、ドイツの歌劇場がよいのですが。》

こうしてすでにマーラーは、ハルの惨めな劇場で数週間過ごした後、オーケストラの指揮が彼の生活の糧に、さらには彼の天職にまでなることをもはや無視できなくなった。マーラーは、1898年4月ナタリー・バウアー＝レヒナーに、「ベートーヴェン賞」の失敗は彼を《劇場の地獄》に落とした、と言明していたが、当時の彼はこの《地獄》が直ちに彼にとって呼吸する空気ほどに必要なものとなることを忘れていた。彼の活動欲求は大半の作曲家がそうであるような《象牙の塔》に引きこもることだけでは決して満足しなかっただろう。

1880年6月末マーラーのキャリアはすでに確かなものになっていたようだ。ツヴェレンツが1880-1881年の冬季、イーグラウ劇場の監督に任命され、彼はマーラーにこれまでの協力態勢を維持する提案をしている。では何故マーラーはレーヴィーに彼の故郷での仕事を受け入れることが出来ない、と書いたのであろうか。おそらくその理由は、親が見栄で自分たちの町の小劇場で息子が働くのは息子にふさわしくないと思い込んでいたからだ。以上があり得べき理由であり、そのために、ハルとの契約後、マーラーは以前の生活と同じ不安定で不如意に落ち込んでいくことになる。とりわけこの年の10月は最悪だった。悪い知らせが相次いだ。ロットは気が狂い、この2年ほど相談相手だったクリスパーもまた、精神が不安定になった。エミール・フロイントは数年前ゼーラウでマーラーに恋をした娘が自殺してしまったと知らせてくるというありさまだ。《どこに行っても見えてくるのは苦しみばかり》と、マーラーは11月1日フロイントに手紙を書く。《そしてこの苦しみは最も奇妙な衣をまとって人の子をからかい笑いのめすのだ。地上で幸せにしている人を一人でも知っているのならすぐ僕にその人を教えてほしい、まだ僕に残されているほんの少しばかりの勇気が失せてしまわないうちに、お願いします。最も俗悪な野卑さに対して高貴で深みのあるものが戦いに挑み、即座に戦いに敗れてしまうのを見てしまった人は[21]、自分自身のことを考え自分の哀れな運命に思い至って身を震わせるしかない！　今日は万霊節です。》マーラーはフロ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

イントに一月前から菜食主義者になりこの新しい食餌療法は《最も幸福》な影響を与えてくれると言っている。

とはいえフロイントへの手紙には良い知らせも含まれている。もう一度この苦しみが実を結び、マーラーは1年半以上も前から取りかかっていた《まさしく苦しみの子》である彼の〈童話劇〉[22]、『嘆きの歌』を完成した。ナタリー・バウアー＝レヒナーによると、完成する数日前強い奇妙な感覚に捉えられ、しかもそれは何度も繰り返し現れた。それは同じパッセージに取りかかる度に現れた、しかもそれは外面的には取るに足らないパッセージだった。何度も彼は部屋の暗い隅に彼自身の姿を見たように思った。そのとき彼はほとんど耐え難い肉体的苦痛を感じ、あたかもこの分身が壁に穴を開けて通り道を作ろうとしているかのようだった。そのたびに彼は仕事を中断して部屋を離れなければならなかった。そしてある朝、ひどい神経熱に冒された[23]。

後に彼は、過剰な仕事と体に悪い食餌制限によって彼の身体組織が冒され衰弱したが、これらの出来事がその原因であるとみなしている[24]。このような混乱の原因はより深いものだろうと今日では考えられよう。実際当時の彼の創作は彼の情緒と密接に結びついていた。これからもたとえば『亡き子を偲ぶ歌』や『交響曲第六番』といった別の《苦しみの子》の作品に対して彼は聖なる恐怖のようなものを感じることになろう、あたかもこれらの作品は、彼がこれらの作品を作曲したり指揮したりするたびに、これらの作品を推敲しているときに支配していた苦しみの情動に再び彼を引き入れるもののように。同じようなことはライプツィッヒでもあり、『第二交響曲』の第一楽章を作曲しているとき、彼自身の体が棺の中に横たわっているのを見てしまう。

彼自身の作品に関してマーラーは常に判断の確かさを示すことになるが、これは創作家にあってはきわめて稀なことだ。これまでに彼は作品の大部分を破棄してきた、それはそれらが彼よりも生き延びることが彼にとってふさわしいものとは思えなかったからだが、今度は違って『嘆きの歌』の価値を彼は少しも疑っていない。1893年ナタリーに以下のように言いさえする、《この最初の作品はこれだけでも十分に独創的だ。[25]》完成してしまえば後はもう演奏されるのを待つばかりとなろう。ところで、ウィーンを自分の故郷にした若者にとって、演奏してもらう最適の方法がある。音楽愛好家協会の《ベートーヴェン賞》に打って出ることだ[26]。1875年に制定された500グルデンの賞金は若い作曲家にはあり得べき最大の奨励金である。

実際マーラーは1878年、すでに『アルゴー船の勇者たち』の序曲[27]でそのチャンスを摑もうとしたようだ。しかし後に彼がナタリー・バウアー＝レヒナーに以下のような言葉で語ることになるのは、『嘆きの歌』が提出された時期の二度目のことである。《ブラームス、ゴールトマルク、ハンスリック、リヒターが席を並べた音楽院の審査委員会[28]が僕の『嘆きの歌』に600グルデンのベートーヴェン賞を与えていたのなら、僕の全人生は別のものになっただろう。当時僕は『リューベザール』の作曲をしていたし、ライバッハに行かなくても良かったに違いない。そうすれば、こんなおぞましいオペラのキャリアから解放されただろうに。その代わり作曲賞を受賞したのはヘルツフェルト氏で、ロットや僕は空手で出て行った。ロットはそのために絶望のあまり気が触れ僕は劇場の地獄に落とされ、そして永遠に地獄巡りだろう。》

NII-Electronic Library Service

Meisei University

奇妙な話かもしれないが、このちょっとした自伝的な話の中に、マーラー自身による間違えがある。このような不正確さは粗忽な伝記作者にこそふさわしいものだが、責任はマーラーにある。まず彼は自分の提出したベートーヴェン賞の期日を混同している、『アルゴー船の勇者たち』序曲を提出した1878年のものと1881年の『嘆きの歌』のものとを。まず彼が後者のスコアを審査委員会の手にゆだねたのはライバッハの滞在後、つまり1881年になってからではないと不可能である。つぎに1881年の賞は12月に授与されたが、ロットは10月からすでに気が触れていた。最後にヘルツフェルトが問題の賞を獲得するのはもっと後のことだし、賞金金額は500グルデンであって、600グルデンではない。

初期のマーラー伝記作家たちは、もちろんマーラー自身が認めたことであるので、『嘆きの歌』をベートーヴェン賞の審査委員会に提出したのは1880年であると誰もが認めた、つまり、これはライバッハに行く前のことである。彼がきわめて速くスコアを終えたのは[29]提出期限が設けられていたためであるようだ。また彼は11月1日のフロイント宛の手紙で《あらゆる方法を使ってでもこの作品を演奏してもらう》と語り、このベートーヴェン賞はまさに打って付けのものであることは確かだ。ところがマーラーが作品を提出した時期について最初に疑義を差しはさんだのはドナルド・ミッチェルだった[30]。彼が特に強調したのは作品の完成（11月1日）と賞の授与（12月6日）の期間が短いことで、それが短すぎるので全員の審査員が作品の審査をするのは不可能だということだ。また協会の古文書が示している通り1880年12月は、1879年と同じく、優勝作品はなかった。

さらにマーラーが1880年に作品を提出できなかった差し迫った理由がある、それはその年賞の規則そのものが彼に参加を禁じていた。というのは、1880年12月16日の楽友協会役員会の会合で、賞の規約が原因で数年続けて受賞者無しになっていることから、規約改正の必要があると決定された。それまではすべての志願者は少なくとも2年間音楽院に在籍している生徒でなければならなかったが、1881年からは音楽院に在籍したことのあるものはすべてコンクールに参加する資格を有する。それゆえマーラーは1881年12月まで、つまり規約改正以前に、彼の作品を提出することは出来なかったし、それ以前の1878年の提出に関してもおそらく考慮する必要はないものと思われる。

1881年12月15日ベートーヴェン賞は音楽院でのマーラーの恩師であるローベルト・フックスの『ピアノ協奏曲ロ短調』に与えられる、また同年、ヴィクトール・ヘルツフェルト[31]の序曲『生涯の夢』[32]とH.フィンクの『序曲ヘ調』［長短の区別無し］は審査委員会から《賞賛に値する》ものと評価された[33]。ハンス・ロット[34]もまたこの年審査委員会に2曲の彼の作品を提出したか、そう望んだかは、確かだと思われる。賞の発表がある前すでに彼は理性を失っている。それゆえ次のように仮定しなければならない。1898年マーラーはベートーヴェン賞と1879年の作曲コンクールを混同した、そしてこのコンクールではハンス・ロットには賞が与えられなかった[35]。

このように情報が不正確なものであったとしても、マーラーが実際に《ベートーヴェン賞》を獲得したいと思っていたことは疑い得ない。彼の話を聞き入れると、彼の失敗は当時の《音楽院》の敵意、つまりブラームスやハンスリックの敵意が原因になる。そこで、この敵意の証拠、つまり当時のオーストリア音楽の若い力とブラームスとの関係を調べることが必要となる。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

註

1) この旅行計画は1880年3月3日アントン・クリスパー宛ての手紙に述べられる。

2) 1896年ハンブルク、『さすらう若者』の初演時、彼はその成り立ちについて思い出す（NBLS）。

3) ギード・アドラーの所有になる資料の中に、「ワーグナー協会」の会員（後に理事）であり「アカデミー合唱協会」の会長であるフランツ・シューマンの短い手紙がある。1880年2月（もしくは4月）10日付け。アドラーは彼にマーラーを合唱指揮者［*Chormeister*］のポストに推薦し、彼の答えは、「このポストはまだはっきりと決まったわけではありませんが、すでに誰か有名人の名があがってます。マーラーの能力は私にも十分伝わっております。コンサートの指揮は別としても、ここでやらねばならない仕事は彼には役不足でしょう。実際この手のポストは全体的に、芸術的素養よりも職人的な技術が必要になります。マーラーに対して好意を持っておりますし、彼の才能も知っておりますから、私としては、このポストを彼には推薦できませんし、なによりも彼の能力を考えてしまいます。最初の日から彼が落胆してしまうのは確かでしょう」（RAM, p. 15）。

4) アルマ・マーラーが所有していた『ピアノ四重奏』第一楽章の草稿は、一頁目にレティッヒ出版の判が押してある。このことからマーラーはこの譜面をレティッヒに託し彼は自社で出版しようと計画していたことを示していると思われる。

5) 宮廷歌劇場のホルン奏者であり音楽院教授でもあったリヒャルト・レーヴィーの息子のGustav Lewyは、まず歌手になり、フルート奏者になった。商科専門学校でヨハン・シュトラウスと同級生だったが、ウィーンのMüllerという音楽商で四年間、次いでペテルスブルクの《音楽博物館》で働いた。1852年にウィーンに戻ると、自分で音楽専門店を開き、オットー・ニコライ後の演奏会を組織し、アントン・ルービンシュタインを西欧に招聘し、1876年には、ヨハン・シュトラウスのフランス巡業を企画実行し、1869年に「ウィーン合唱協会」と同時に演奏会実行組織を作り上げたが、これは《オーストリアで最古のもの》である。

6) マーラーの自筆サインのあるこの契約原本はウィーン国立図書館が所蔵している。

7) これらの詳細はハルの劇場に割かれた記事による（*Linzer Volksblatt* 24、1925年6月14日号196-197頁、イラスト入り付録記事 *Das Heimatland*）。

8) Rudolf Baldrianによって見つけられた「目録」による。『マーラーの最初の契約』と題された彼の記事で引用される（*Die Österreichische Furch*: X, 42, 16 oct. 1954）。

9) ハル滞在中にマーラーはオッフェンバックのオペレッタを愛好するようになった可能性がある。たとえば彼はブダペスト歌劇場の監督時代にオッフェンバックをレパートリーに加えている。

10) Karl MILLÖCKER（1842-1899）はグラーツとウィーンの宮廷楽長で、流行オペレッタ作曲家であり、作品には『魔法の城』『貧乏学生』『ガスパローネ』など。

11) アルフレッド・ロゼー・コレクション。エンマ・マーラーの息子、エルンスト・ロゼーもまた、同じ年の4月27日付け、ブルックナーからの端書を所有している。ブルックナーはマーラーを友人のクルシシャノフスキーと一緒に音楽院に来るように要請している。

12) このメロディーは当時ドイツ諸国に大いに流行ったが、気まぐれな詩が付いている。「我が子よ、気でもふれたか。ベルリンへ行け。」しかし、場所によって都市の名前は変わる。それぞれの都市がライバルの都市の名に入れ替えるのが習わしだった。たとえば、ベルリンでは、「ウィーンへ行け」と歌う。

13) 上記Baldrianの記事を参照。

14) 当時の為替レートとこの時代からの物価の推移を勘案するとこの額はほぼ1979年現在の126フランス・フランにあたる。とはいえこの数字は参考程度のものでしかない、というのは、これほど長い時間が隔たっているのでしっかりとした比較の基礎的資料が得られない。結局購買力や金の価値の変遷を考慮するとおそらく少なくとも数字を三倍ほど上方修正することになろう。

15) Alma MAHLER: *Gustav Mahler, Erinnerungen und Brief*, p. 138.［邦訳、アルマ・マーラー『マーラーの思い出』酒田健一訳、白水社］Mizzi（Marie）ZWERENZは1856年生まれ。オペレッタの著名な歌手となる。彼女は、ウィーンで最も顕著な教師の一人である、ウィーンの歌手ローザ・パピーアの弟子だった。

16) アルベルト・シュピーグラー宛1880年6月21日付けの手紙。先の方でマーラーはシュピーグラーにジャン＝パウルの本を届けてくれるよう頼んでいるが、実は自分で買うだけのお金5フローリンがない、と打ち明けている。

17) Heinrich VON ANGELI（1840-1925），旅館の息子、1876年からウィーン・アカデミーの教授、オーストリア、イギリス、ロシアの桂冠画家。フェリックス・ワインガルトナーは『回想録』で、1907年、フランツ・ヨーゼフ皇帝から叙勲されたとき、アンゲーリ教授が彼の前に叙勲されたと書く（『回想録』II、166）。

18) この挿話は1886年6月フリッツ・レーアがマーラーに宛てた手紙の一文で確かめられる。彼の姉妹ベルタがニーナ・ホフマンとバート・ハルに湯治に来ていたとき、フリッツは彼に「あの奇妙な貴族たちの時代」を経験したところかと尋ねている。（Alma Mahler: *Ein Leben mit Gustav Mahler*. 未刊行資料）

19) たとえばカッセルで彼はよく懲戒の対象になったが、それは決して単なる怠慢ではなく、反抗的態度をとる

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ことの証だった。

20）著者所蔵。

21）『書簡集、1879-1911』No. 5.　この手紙でマーラーはピアリスト修道会の修道院でロットの悲しい冒険をほのめかしている。

22）この用語は一般に劇作品を示すが『嘆きの歌』のオリジナル・スコアを調べると、この作品は決して舞台作品として着想されていなかった。

23）ロマン主義時代に作り出されたたくさんの幻想物語の一つを読んでいるような気になる。当時の文学では瓜二つは常に重要な役割を担っている（たとえば、シューベルトが作曲したハイネの有名な『分身』、参照）。

24）Natalie Bauer-Lechner : *Erinnerungen an Gustav Mahler*, p. 34.［邦訳：ナタリー・バウアー＝レヒナー『グスタフ・マーラーの思い出』音楽之友社］

25）Natalie Bauer-Lechner : *Mahleriana*.［未刊行資料］1893年8月24日。とはいえマーラーは次のように付け加える、この作品は《多少大げさで飾りすぎ》だ、と。だから再びこの作品を取り上げて（つまり1898年の決定稿以前）《過剰な装飾》をすべて削除しようとした。残念なことにこの作業はほとんど不可能であることがわかった、なぜなら《もう主旋律があまりにもぼやけている》からだった。（おそらくこれは原典版の第一部『森のメルヘン』のことに違いない、後にマーラーはこれを削除することになる。）

26）後に彼もまた、このカンタータ『嘆きの歌』を「汎ドイツ楽友協会」の審査にかける。ロゼのコレクションには1883年9月13日のリストの手紙がある。この手紙は無愛想なほどに簡潔に表現された拒絶の手紙だ。ところで、この時期リストは楽友協会の会長である。

27）Richard von Perger, Robert Hirschfeld『帝国及び王国音楽愛好家協会の歴史』ウィーン、1912、P. 166。二人の著者もまたマーラーの序曲の主題は記録書類の中に見つけらると言明しているが、1912年以降それらの記録書類は不幸にも跡形もなく消えてしまった。1879年マーラーの二人の友人、ハンス・ロットとルドルフ・ピヒラーもまた同じコンクールに提出したが落選であった。

28）実際この審査委員会の構成員は他にヨーゼフ・ヘルメスベルガー父、ヴィルヘルム・ゲリケ、ヨハン・ネポムネク、そしてマーラーの作曲の恩師フランツ・クレンだった。

29）ナタリー・バウアー＝レヒナー『マーラーの思い出』p. 34.

30）Donald Mitchell : *Gustav Mahler. The Early Years*, p. 148.［邦訳、ドナルド・ミッチェル、喜多尾道冬訳『マーラー　さすらう若者の時代』音楽之友社、79頁以降。ただし本訳書は上記のものの翻訳ではなく、日本側の翻訳者と出版社によって編集されている。もちろん原著者の許可を得ているとのことである。］

31）後にまたViktor von Herzfeld（1850-1920）にブダペストで出会うことになる。彼はここで『新ペスト新聞』の音楽批評家になった。マーラーとはかなり親密な関係を結ぶことになるが、『第一交響曲』初演のとき、相当辛辣な批評を書いている。

32）グリルパルツァーの作品につけたもの。

33）ヘルツフェルトは1883年にベートーヴェン賞を得る。

34）マヤ・レーアは、ロットが1880年のベートーヴェン賞に彼の2作品を提出し、そのために9月ブラームスのところに行ったと断言している（次項参照）。

35）前項、および第4章参照。また、Max Auer : *Anton Bruckner*, Musikwissenschaftlicher Verlag, Leipzig, 1941, IV, 1, 447.

NII-Electronic Library Service